

【研究主題】

友達と関わりを深めながら協同性を育むための援助の在り方 ～評価からの保育改善を通して～



1 主題設定の理由

生きる力の基礎を育む幼児期は、他者との関わりによって人との関係が深まっていく体験を積み重ねることが重要とされている。幼児を取り巻く人間関係は希薄化し、心身の成長や発達に必要な人との関わりや、互いに成長し合う豊かな体験が十分にもてない状況である。

本園の園児の実態として、入園前に保育経験がある子が多く、自分らしさを出しながら様々な遊びに興味や関心を持ち、友達と関わり合い楽しく遊ぶことはできる。しかし、相手の思いを受け止めながら協力して遊び進めることに難しさがあり、集団における「人と関わる力」を育む必要性が見えてきた。

協同性を育むためには、「人と関わる力」の深まりが大きく関連していることを踏まえ、幼児が友達と考えたり工夫したりしながら協同に向かう過程を捉え、保育ドキュメンテーションを通して評価からの保育改善を進めていく。また、幼児同士が互いに認め合える関係を築けるようサークルタイムの充実を図ることで、幼児が友達と一緒に遊び込む経験を積み重ねていくことにより協同性が育まれるだろうと考え、本主題を設定した。

※保育ドキュメンテーション…幼児の活動や育ちを写真や文字等で記録したもの。

※サークルタイム…幼児が輪になって話し合いや意見交換を行うこと。

2 研究のねらい

評価からの保育改善を通して、幼児が友達との関わりを深めながら、協同性を育むための援助の在り方を探る。

3 研究の仮説

○幼児が互いのよさに気づき、認め合いながら活動を進めることで、友達との関係が深まっていくだろう。

○幼児が主体的に遊び込める環境構成と共通の目的が実現する経験を積み重ねるための援助の工夫をすることで、協同性が育まれていくだろう。

4 研究の内容

(1) 人間関係と協同性について

①幼稚園教育要領解説（3）協同性より

- ・協同性は、領域「人間関係」などで示されているように、教師との信頼関係を基盤に他の幼児との関わりを深め、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていく。

②友達との関わりを深めるとは

- ・幼児一人一人が自分らしく遊び、友達との関わりの中で育つ自発性を基盤に、友達と一緒に活動する楽しさを味わいながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる。
- ・友達と様々な感情を共有する中で、感じ方や考え方の違いに気づき、互いのよさを生かしながら一緒に活動する経験を積み重ねていくことで、認め合う関係性が生まれてくる。
- ・幼児同士が同じ目的に向かって遊び、工夫したり協力したりする楽しさや充実感を十分に味わう。

③人間関係の深まりと協同性が育まれるプロセス

- ・幼児は遊びを通して友達と関わる中で視野を広げ、自己を変容させながら友達との関わり方を学んでいく。
- ・幼児は友達と共に遊ぶ楽しさを経験しながら、友達と一緒に物事をやり遂げる喜びを積み重ねていく。
- ・幼児同士が活動する中で、幼児同士がそれぞれのよさを発揮し、認め合える関係を築いていく過程が協同性につながる。

小学校以降

一人一人がよさを
発揮しながら
協同して遊ぶ



【協同性を育むための教師援助】

- ・ 幼児一人一人の思いや考えを受け止める援助
- ・ 幼児同士の関わりや思いをつなぐ援助
- ・ 友達の思いに気付けるような援助
- ・ 友達と遊ぶ楽しさを味わい、相手のよさに気付けるような援助
- ・ 友達と一緒にやり遂げた達成感や満足感を味わえるような援助

互いに認め合う関係性生まれる
(仲間への信頼感)

共通の目的が実現
する喜びを味わう

相手とぶつかる場面が
生じ葛藤や挫折を感じる

相手の気持ちを理解し、自分
の気持ちに折り合いをつける

遊びや活動をする中で同じ
目的生まれ、工夫したり
協力したりする

自分の思いを伝え
相手の話を聞く

相手にも思いがある
ことに気付く

相手に自分の思いを
伝えようとする

友達と遊ぶ楽しさ
を味わう

同じ場で遊ぶ中で友達
の存在に気付く

好きな遊びを見つけ
楽しむ

【協同的な遊びが展開できる環境構成】

- ・ 幼児同士の遊びが自然に生まれてくる環境構成
- ・ 少人数で互いにに関わり合える環境構成
- ・ 学級全体で主体的に活動をする環境構成
- ・ 知的な広がりのある環境構成

友
達
関
係
の
深
ま
り

協
同
性
の
芽
生
え

教師との信頼関係

入園当初

(2) 評価からの保育改善

① 幼児の友達との関わりを深める中で育つ協同性の視点

幼児の活動を捉える視点

- ① 一緒にいる友達とどのような人間関係を築いているか。
- ② 友達の中で自分らしさは発揮されているか。
- ③ 自分の思いや考えをどのように表現しているか。
- ④ 自分とは異なる思いをもつ他の幼児の存在に気付いているか。
- ⑤ 自己主張のぶつかり合いや葛藤をどのように乗り越え共通の目的を実現しようとしているか。
- ⑥ 幼児同士が工夫し合っているか。
- ⑦ 課題は何か。
- ⑧ 課題は幼児同士協力し合って自分たちで乗り越えていけるものか。

育みたい協同の視点

- ① 友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- ② 自分の思いを伝え、相手の話を聞く。
- ③ 互いに意見が異なることに気づき、受け入れる。
- ④ 自分の気持ちを調整して、折り合いをつける。
- ⑤ 友達と一緒に工夫したり、考えたりする。
- ⑥ 自分の力を発揮し、友達のよさに気付く。
- ⑦ 一人ではできないことも友達と一緒にならでできる楽しさを味わう。
- ⑧ 共通の目的が実現する充実感や満足感を味わう。

(2) 麻生幼稚園の具体的な取り組み

① 互いのよさに気づき認め合えるために

- ・遊びの振り返り、一日の振り返りの時間の工夫と活用をする。(サークルタイムの充実)
(教師がどんな意図をもっているか? 子供たちに何を気付かせたいのか? 学んでほしいのか?)
- ・よさだけでなく課題について、子供たちで話し合いができるように時には教師主導で進める。

② 主体的に遊び込める環境構成について

- ・幼児の遊びから興味関心に応じた環境構成(キャッチする)
- ・挑戦・探求・試行錯誤できる環境構成(場の提示・すべて揃えない環境)
- ・共通のイメージを共有する場や話し合い活動の設定(ここだと思う時に)

③ 共通の目的をもち実現できる援助のために

- ・互いの思いを伝え合える援助(言葉でのやりとりも大事な要素として)
- ・工夫したり考えたりできるような声掛けや見守り
- ・トラブルや葛藤体験を乗り越えていく過程を大切にする援助
- ・自己発揮できる援助
- ・思いや考えをつなげる援助

④ 評価と保育改善について

- ・保育ドキュメンテーションを活用し、幼児理解と指導の振り返り
- ・幼児の活動を捉える視点と、育みたい協同の視点を活用し、幼児の姿をみとる

 **保育改善へ**
RPDCAサイクル

(4) 実践事例

事例Ⅰ：幼児同士で共通の目的をもち主体的に遊びを進めるために

【サークルタイムを通して共通理解を図り、目的を実現していく事例】

2年保育 5歳児

協同性の育ち	育みたい協同性の視点	
♥ 少人数の友達同士で活動を進める楽しさを感じ、友達のアイデアに共感し協力しようとする姿があった。 ♥ 伝え合って遊ぶ中で、友達との異なる考えに気付き、気持ちを調整する姿が見られ、それぞれ思いの葛藤が感じられる。	【次への手立て】 主体的な遊びをもっと発展させるために、クラス全体で共通の目的がもてるようにする。また、伝え合いを通して、集団で関わり合える活動になるよう援助する。	
○幼児の姿	・教師のみとり	※教師の援助 ☆環境構成
9月19日 ○遊びの中で幼児達が作った家で猫になったり、お母さんになりきったりして遊ぶ。 ○A児「Bちゃん、ねこ役ね。Cちゃんもねこね。Aはお母さんがやりたいから。」 ○B児、C児は承諾し、ごっこ遊びをしている。 9月24日 ○遊びの中でハロウィンへの興味が広がり、ごっこ遊びの配役がおばけのイメージに変わる。何やら計画を立てている様子が見られる。教師が、様子を見に行くと、「秘密〜!」と言って嬉しそうな表情をしている。 9月26日 ○A児とB児が、ハサミで段ボールをくり抜こうとしている。なかなかハサミが入らず苦戦している。教師がA児に声を掛けると、「ここからおばけが出てくるようにしたいの!年少さんを驚かせたいんだけど。」	・A児は、遊びの中で自分の思いを伝えられているが、もう少し周りの言葉にも耳を傾けてほしい。 ・B児は、表情が浮かないが自分の思いは伝えられているだろうか? ・C児は、A児やB児に合わせすぎているだろうか? ・友達同士で新しい遊びのアイデアが閃いたことで、自分達で進める期待感をもっている。 ・小グループでの仲間意識が高まっている。 ・困り感を感じているので、友達同士でどのように解決していくかを見ていきたい。 ・年少さんを驚かせたい気持ちで秘密にしていたことがわかる。 ・C児の役割をもっと深く見てみよう。	※ 幼児同士の表情から内面を読み取る。 ☆ 廊下で行っていた遊びを保育室に展開するよう提案する。 ☆ 様子を見守り、どのような遊びの展開に広がるか予想し、段ボールや空き箱など様々な材料を用意しておく。 ※ 秘密にしたい気持ちに共感し、クラスの友達に協力を得ても良いか承諾をもらう。
サークルタイム ○A児「段ボールに穴をあけたいんだけど、どうしたらいいかな? ○E児「あの…のこぎりみたいなやつを使えばいいじゃない?」 教師「そうだね。なんだったかな?確か…なんとかカッター…。」 ○数名児「段ボールカッターだよ!」 ○以前使用したことがある道具の名前が一致して歓喜にわく。教師が使い道を促していくと、A児が「お化け屋敷にしたいの!」とつぶやく。教師が「みんなで進めていくともっと面白そうじゃないかな?」と提案すると、A、B、C児だけでなく周りの幼児たちもみんなで作りたいという気持ちが高まり、様々なイメージの声が上がる。 ・クラスの仲間もA児たちの遊びを知っていたが、話し合いにより遊びの共通理解ができて、お化け屋敷を作りたい意欲が高まったようだ。		☆ サークルタイムを開き、クラスの友達にA児の困り感を話す機会を設ける。 ※ 言葉を掛けすぎず自分達で問題解決に導けるようにする。

協同性の育ち	【次への手立て】
♥ 幼児同士での困り感を自分達で乗り越えようとしている。 ♥ 活動をもっと広げたいという気持ちがあるが、少人数での難しさを感じていた。→※教師の言葉掛けにより、サークルタイムでクラスの仲間にも協力してほしい気持ちが伝えられた。 ♥ 同じ目的をもち自分なりのアイデアを出そうとしている。	伝え合いを通して、様々な幼児同士の関わり合えるようにする。また、みんなで協力しながら、クラス全体で同じ目的に向かう楽しさを味わえるようにする。

お化け屋敷づくりの展開
○お化けのドアや火の玉など他の幼児も自発的に手伝う姿が見られた。 ○10月上旬になると、運動会などの活動と並行しているため、遊びがなかなか進められない。 ○興味が薄れてしまった幼児が多いが、お化け屋敷の場所で遊んだり、コソコソ道具を作ったりしている幼児もいる。

○幼児の姿	・教師のみとり	※教師の援助 ☆環境構成
10月上旬		
10月15日 教師の援助としてのサークルタイム ※☆教師の願いとして、みんなで一度共有した目的を最後までやり遂げてほしい。また、A・B・C児の遊びの様子から、お化け屋敷を完成させたい気持ちを汲んで、サークルタイムを提案する。 ☆幼児が活動に向かう見通しをもてるように、お化け屋敷を開く日を設定する。 ※なってみたいお化けやお化けが出そうな場所など幼児の言葉を引き出していきながら、再度興味をもてるように助言していく。 ○自分の気持ちをみんなに話したい気持ちから発言が盛んになる。また、未就園児が来園する日に見せてあげようと意見がでる。 ・最初は教師が主導していたが、遊びへの意欲が復活した。新たな目標ができたことで遊びに勢いがついたように感じる。		
10月18日 ○まだ準備が続いている時にA・B児は出来上がった大道具の中に入って遊んでる。 ○C児が不満げな表情を見せながら準備を進めている。教師が声を掛けると「頼まれたのにやってるのはCだけ…」と不満を訴えた。	・3人で活動することが多いがA児が、主導権を握りやすく、B・C児は言いなりになる様子が見られていた。 ・C児は、以前からB児と仲が良く、A児の言動に不満を言うことが多かったが、<u>自分なりに気持ちを調整していた。</u> ・B児は、<u>C児の状況や気持ちに気付いているのか？</u> ・自分のやりたい事を伝え合って、3人で対等に遊びを進めてほしい。	※A・B児にはC児が一人で作業を続けていることを伝える。 ※C児には、お化け屋敷に向けて頑張っている姿を認め、みんなで協力して進めたい気持ちに共感する。
サークルタイム ※みんなで遊びを進めていく時に困ったことがなかったか全体に問いかけ、個別な特定はせずC児がおかれていた状況を話す。 ○他の幼児間でも、同じような困り感を感じたという意見が出た。なぜ、作業が進まなかったか促すと、「遊びを試していた」との意見が出た。するとE児が「みんなでやることだから、みんなで作ってからでもいいんじゃない？」と全体に向けて話した。		
○A・B児はC児が描いた絵を切ったり貼ったりと役割分担して協力して遊んだ。 ○C児も「これ終わったら試してみよう？」とA・B児を誘っていた。	・サークルタイムでの話を受けて、A・B児はC児の姿に気付くことができた。 ・C児は、E児が代弁してくれたことがA・B児に思いを伝える後押しになった。	

協同性の育ち
♥ 友達関係で伝え合うことの大切さに気付き、葛藤や気持ちを調整しようとする姿が見られた。 ♥ それぞれの思いの違いを受け入れながら、みんなで進めるために必要な約束やルールを生み出していた。



【次への手立て】
お化け屋敷の完成に向けて、幼児同士が見通しをもちながら遊びを進められるようにする。また、みんなで決めた<u>ルールの共通理解を図り、クラスで協力し、やり遂げる充実感を味わえるようにする。</u>

お化け屋敷の実現の結果と協同性の育ち
♥ 園の行事で未就園児保育体験日があり、「未就園児にお化け屋敷を楽しんでもらおう」という新たな目標ができ、目的を実現するために協力し合う姿が育っていった。 ♥ サークルタイムの継続から、「お化けになりたい」との共通の思いがあることがわかり、自分のなりたいお化けの意見を出し合い衣装作りに発展した。様々なお化けを調べていく中で、ハロウィンが近いということもあり、お菓子作りを進めたり、未就園児を楽しませるために必要なアイテムを作ったりするなど、お化け屋敷とハロウィンのイメージを合わせて楽しむ姿が見られた。 ♥ 未就園児に合わせた言葉掛けや関わり方など当日を見通した意見も出るようになり、クラスみんなでルールの共通理解を図っていた。 ♥ A・B・C児だけではなくクラス全体の目標としていたお化け屋敷が実現し、それぞれがお化けという同じ役割をもって活動できたことで、同じ目的を実現していく面白さや楽しさを味わうことができた。

【考察】

- ・幼児同士が遊びを共有したり、つまずきや困り感を解決したりするためにサークルタイムを設けた事で、小グループでの遊びの興味がクラス全体の関心に広がり、主体的な遊びに発展していったと考ええる。
- ・幼児同士の関わりや遊びの展開を予想し、集団で取り組むために必要な援助の手立てを実践していくことで、幼児は友達と共通の目的をもつことができ、友達と協力するために自己調整したり、遊びを工夫したりする気持ちが育ちも見られた。

事例2: 幼児が共通の目的を実現する充実感を感じながら遊びを深めていく

【ばら組祭りに向けて幼児同士で折り合いをつけながら遊びを進めていった事例】

2年保育 5歳児

協同性の育ち
○クラス全体で共通の目的をもち、サークルタイムの機会を通して、それぞれの思いや考えを共有し、みんなで遊びを進めようとする姿があった。 ○友達の良さに気付き、遊びをより良くするために友達に協力を得ようとしたり、積極的に考えを出し合ったりする。

育みたい協同性の視点



【次への手立て】
それぞれの思いを出し合う中で、遊びのイメージをすり合わせながら、1人ではできないことも友達がいることで、やってみようとする気持ちが育つように援助する。



○幼児の姿	・教師のみとり	※教師の援助 ☆環境構成
11月11日 ○地域の祭りのポスターや実際に祭りに参加し、山車を知っている A 児の考えから山車作りが始まった。A 児を中心に B 児と C 児も協力しながら進めている。山車の上に何を装飾するかで様々な意見が出る。 ○A 児は本物に近い人物の人形にしたい様子で話すが、B 児はイメージがつかない。C 児が、「ばら組の山車でしょ!」と意見する。 ○A 児から「じゃあ、みんなに聞いてみようかな?」との意見がでる。B 児と C 児は、周りにいる友達に声を掛けにいき、幼児が主となり、サークルタイムが開かれた。 ○C 児の意見を再確認した A 児は「ばらの形でもいいかな?」と、全体に投げかけると、賛同を得ることができ、嬉しそうに次の準備に取りかかった。	・A 児は、山車への思い入れが強く、自分のイメージを通したい気持ちもある。 ・B 児は、友達の話しているイメージを読み取ったり、集団での遊びへの意欲が低かったりする。 A 児から誘われたり頼られたりしたこと、自分の気持ちが言いやすい雰囲気ができている。 ・C 児は、興味が散漫しやすいが、A 児と関わりたい気持ちが増しているので、友達と遊び込む経験ができるようにしたい。 ・A 児は、C 児の言葉を聞いて、みんなで進めていることを再確認した様子で、気持ちを切り替えていた。 ・様々なイメージが混在している。A 児や B 児、C 児が話の中心になってほしい。 ・自分なりに折り合いをつけられたことに満足感もち、さらに、みんなから賛同してもらえたことで充実感が増した。	☆B 児は意見を出すことに消極的なので、意見する機会を促す。 ※C 児の言葉に共感し、「みんなはどうしたいかな?」と一緒に考える。 ☆幼児が主体的に話し合えるように見守る。 ※意見がまとめられないので、サークルタイムの経緯を話し、順番に意見ができるようにする。 ※C 児からの意見を全体にも伝えるように話すことで、C 児が話しやすい環境をつくる。

協同性の育ち
○友達と一緒に遊びを進める楽しさから、相手の思いに気付き自分の気持ちとの葛藤があった。 ○自分だけで遊びを進めるのではなく、集団という意識をもち、友達に意見を求める姿が見られた。 ○友達から認めてもらえる嬉しさを感じ、遊びの発展につながった。



【次への手立て】
遊びを深められるように、引き続きイメージの共有を図りながら、目的を実現していき、友達と一緒にやり遂げた充実感が味わえるように援助する。



ばら組祭りの実現の結果と協同性の育ち
○A 児を中心に山車作りを進めていく中で、クラスのメンバーの名前の入った提灯や山車の中で、お囃子を演奏する下座連の人を表現するなど、クラスの仲間が自分の得意なことを活かしながら協力して完成させていった。 B 児や C 児は2人で役割分担しながら提灯を作り上げ、友達から認められたことで、集団遊びへの参加意欲が増し、今まで興味がなかった遊びも自分から探求するようになった。 ○活動の振り返りだけではなく、遊び始める前にも遊びの復習をすることで個々の遊びの目的が明確になり、遊びが深まっていった。 ○祭りのイメージから、お店屋さんや踊りなどの活動につながった。年少組をお祭りごっこに招待し、楽しんでもらえたことで、満足感を味わうことができた。

【考察】

- ・自分本位な考えで遊びを進めようとしていた幼児も、友達の協力を得たことで山車作りが順調に進み、一人の山車からクラスの山車という意識の変化が見られた。友達と進めている意識が、気持ちに折り合いをつけるきっかけになったと考える。
- ・友達の意見を聞き入れながら、遊びのイメージを実現していく充実感は、友達に対する信頼や仲間意識の芽生えにつながると考える。

事例3：保育ドキュメンテーションを活用した保育の評価と改善

○幼児の姿 ・教師のみとり ※教師の援助 ☆環境構成

幼児の活動を捉える視点と育みたい協同の視点から 幼児の育ちを捉える（一部抜粋） ～保育ドキュメンテーションを活用したカンファレンス～

- 走ることに意欲的な幼児と苦手意識をもっている幼児が、クラスみんなでバトンをつなぐという目標に向かう過程で友達関係を深めていった。
- 特に、走る事が大好きで負けず嫌いのA児と、集団の中で体を動かすのが苦手なB児が互いを理解し、葛藤やつまずきを乗り越える姿。
- バトンをつなぐために少人数やクラスごとでサークルタイムを重ね、友達の思いを考えたり、活動をより良くするための方法を伝え合ったりしながら、繰り返しリレーに取り組んだ。
- ・A児とB児が関わっていく中で、それぞれにどうしたらバトンをつなげるか考え、試行錯誤や工夫など折り合いをつけていくための過程があったのではないだろうか？
- ・教師の援助や今まで経験など活動の積み重ねがあり、B児は友達からも苦手さを共感してもらえたことで、自分の課題と向き合えるようになったのではないだろうか。また、友達への安心感が走ることへの意欲につながったのではないか？



実践に向けた教師の援助や環境構成の再構成

- ※A児には、相手に合わせた言葉掛けやリレーをチームで取り組むという意識が育つよう、チームをまとめたり、励ましたりできるような言葉掛けを促していく。
- ※B児には、集団の中で走れたことや友達と協力する姿を認め、自分の成長を感じ取りさらなる自信につなげてほしい。
- ※幼児たちが友達の思いを受け止めたり、工夫したりした姿を取り上げていく。
- ※友達関係が深まった過程やみんなで目的を達成できた成長の姿を全体に伝え、成功体験が次の遊びに生かせるようにする。
- ☆夢中で取り組む姿を取り上げていき、遊びが繰り返せるような雰囲気づくりをする。
- ☆幼児同士のトラブルは見守りながら、自分達で問題解決ができるようにする。
- ☆状況に応じて意図的にサークルタイムを設け、幼児の思いの共有を促し、話し合う機会をつくっていく。



幼児の言動の内にある育ちをみとり、個人とクラスの課題や教師の指導の工夫などを話し合っていく。
※KJ法による育ちの共通理解と指導の振り返り



再構成からの幼児の変容

- A児は友達の気持ちを聞こうとする姿が見られ、自分の走りにさらに自信をもちチームをリードする姿が見られた。
- B児は友達からの期待を感じながら、自分なりに走れたことや、友達から頑張りを認めてもらえたことが大きな自信となり走る意欲が高まった。運動会では、大勢の人の前で練習通り表現できなかった場面も多くあったが、リレーでは懸命に走りバトンをつなぐ姿が見られた。
- リレーを走る順番やバトンの渡し方など、幼児達で主体的に話を進める姿が見られた。
- 年少児も一緒にリレーに参加したり、話し合いを進めていったりする中で、年長児としての自覚をもち、自分の言葉で気持ちを伝え、自信をもって取り組むことができた。



【考察】

- ・活動における幼児の気持ちや友達との関係をみとり、援助や環境構成を再構成し実践していくことは、幼児のさらなる育ちにつながると考える。保育の評価と改善の手立てとして、保育ドキュメンテーションを活用した保育カンファレンスは有効的な方法であった。
- ・幼児の育ちについて、『幼児の活動を捉える視点』をもとに話し合っていくことで、幼児の育ちの過程が可視化され、職員間の共通理解を深めることができた。
- ・『育みたい協同の視点』からは、幼児が友達関係を深めていくための課題を見出すことができた。
- ・援助や環境の再構成から、幼児が目的に向かって友達と関わっていく中で、友達の声掛けや励ましなどの期待に応えたい気持ちと、実践を繰り返す中で得た自信が幼児の変容につながった。

5 成果と今後の課題

(1) 成果

- 積極的にサークルタイムを取り入れた事により、遊びや生活の中で共通の目的をもつ機会が増え、自分達で課題解決したり、遊びをさらに面白くするために創意工夫したりするなど、遊びの深まりとともに、友達との関わりが深まっていった。また、個の遊びでの学びを園全体で共有することで、更なる遊びの深まりや発展が見られた。
- 保育ドキュメンテーションを通して幼児の育ちを可視化し、「育みたい協同の視点」を意識した保育の工夫や改善により、幼児は友達と共通の目的をもちながら主体的に遊びを実現しようとする姿が見られ、協同性の育ちにつながった。また、職員間での情報の共有により教師は幼児理解が広がり、幼児の言動の意味を捉えていけるようになった。

(2) 課題

- 幼児が友達との関係を深めるには、伝え合う力と互いに認め合う関係性の必要性を感じる。遊びや生活の中で幼児が思いを言葉にすることや、相手の話を聞き入れ友達関係を深めることで、互いに育ち合えるようになっていくことを踏まえ、教師はさらに個々の育ちをみとり、幼児同士が互いに認め合い良好な関係性が築けるよう支えていく。
- 幼児が共通の目的に向かって継続的に遊び込めるような環境構成と、互いに学び合える援助をしていく中で、協同性を育ていけるような保育を実践していく。
- 保育ドキュメンテーションを保護者に配布することによって、園での活動や幼児の育ちをどのように受け止めているか把握できるよう懇談会やアンケートを実施し、園と家庭で共通理解し合える機会を図っていくことで、保育ドキュメンテーションの効果を高める。



【引用・参考】

- ・幼稚園教育要領(文部科学省 2017)
- ・幼稚園教育要領解説(文部科学省 2017)
- ・幼児理解に基づいた評価(文部科学省 2018)
- ・幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(文部科学省 2021)
- ・指導と評価に生かす記録(文部科学省 2021)
- ・子ども主体の協同的な学びが生まれる保育(大豆生田啓友)
- ・保育の質を高めるドキュメンテーション(秋田喜代美、松本理寿輝 監修)
- ・協同的な学びと対話的保育(加藤繁美、秋山麻実)
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿(無藤 隆)